

# 乳幼児をもつ親の地域とのつながりの変化と それに関連する要因

— 3年間の変化を中心に —

神田直子 山本理絵

## I. 研究目的

現代の乳幼児の子育てをめぐるには様々な問題点が指摘されているが<sup>(1)</sup>、とりわけ地域社会の変容や少子化の中で、主に子育てを担う母親<sup>(2)</sup>の、地域の人々とのつながりの薄さが指摘されている<sup>(3)</sup>。

内閣府の調査では、「近所と親しくつきあっている」は、大都市では町村の約半数であり、31%にすぎない。さらに我々が行った中小都市、町村に住む1-3歳児をもつ約1500人の母親を対象とした調査〈2001年調査〉では、地域の人と親しく相談したり、子どもを連れて行き来をしたり預けあいのいずれもしていない親が少数ではなるが存在しており、その人たちの育児不安が高く支援要求が強いことが示唆された<sup>(4)</sup>。

これまで筆者らは、上記の2001年調査をスタートとして、同一の母親を対象に、01年、02年、04年の3回にわたって、その育児不安とそれに関連する様々な要因について縦断的調査を行ってきた。今回は、この調査データのうち、01年調査と04年調査の結果を基に、このような孤立要因すなわち「周りにいる地域の人々とのつながり（地域とつながり）の薄さ」という視点から分析する。

子どもの年齢発達にともない、親の孤立状況はどのように変化していくのだろうか。年齢進行にともなう全体的な傾向のほかに、個々の親ごとにその変化をたどっていった場合、地域とのつながりが深まっていく場合と、いかなればあいがあるのではないか。そのような個別の親ごとの変化に際して、どのような要因が関連しているのか、すなわち孤立状況を解消させる条件や、それを持続させてしまう条件があるのだろうか、これらの点について検討したい。

本研究ではこのような、親の地域でのつながりの継時的、発達的变化の様相を明らかにし、その変化または変化しないこと（持続）と関連する要因を見出

すことを目的とする。またそれに先立って、本研究の対象者たちの地域でのつながりの状況とそれに関連する要因を概観する。

これらのことを実証的に明らかにすることによって「地域でのつながり」について孤立状況を解消し、地域の人々とつながりを作っていける援助のあり方、地域で孤立している人々に必要とされる子育て支援について考えたい。

このようなことを通して、現在の全国各地・各種機関や団体・個人によって行われている子育て支援事業について、「地域での親どうしのつながり」という点で、何らかの寄与ができるのではないだろうか。

## Ⅱ. 方法

### <調査方法>

「2001年調査」（01年調査、以下表中では01と表すことがある）は、愛知県内12カ所の保健センターの検診（1歳半、3歳）受診者を対象にセンターより調査用紙配布し、郵送にて返送してもらった。配布数は2,519、有効回答数は1,457、回答率は57.8%。調査時期は2001年2月。

「2004年調査」（04年調査、以下表中では04と表すことがある）は2001年調査対象者のうち、継続調査に同意した人1,115人を対象として、郵送にて調査を依頼し返送してもらった。有効回答数は907、回答率は81.3%。調査時期は2004年2月。

### <分析対象者>

本研究で分析の対象としたのは、上記の2001年調査回答者（1歳または3歳の親）と、2004年調査回答者のうち2001年調査回答と照合可能であった人である。回答者の子どもは、01年に1歳児で04年に4歳になった人（1歳開始グループ）は、369人、01年に3歳児で04年に6歳となった人（3歳開始グループ）は384人である（表1）。

表1 分析対象者（子の年齢別）

	人数	01年調査		04年調査
1歳開始グループ	369人	1歳	→	4歳
3歳開始グループ	384人	3歳	→	6歳
合計	753人			

乳幼児をもつ親の地域とのつながりの変化とそれに関連する要因—3年間の変化を中心に—

### <地域とのつながり質問項目>

01年調査、04年調査ともに、地域とのつながりに関する質問項目として、「子ども連れで遊びに行ける家が近所にあるか」「子どもを預かりあう家があるか」「子育てについて悩みや心配事を相談できる知人が身の回りにいるか」の3項目を設定した。回答の選択肢は、「ある」と「ない」である。

つながり総点:上記3質問への回答を、「ある」が2点、「ない」が1点とし、合計点を「つながり総点」とする。数字が高いほど地域とのつながりが強い。

孤立群:つながり総点が4以下を孤立群、5以上を一般群とする。各群、点数別のそれぞれの人数は表2の通りである。

表2 地域とのつながり総点 (子どもの年齢別)

	つながり総点	孤立群		一般群		合計	
		3	4	5	6		
年齢 (01年調査)	1歳	人数	10	62	198	98	368
		%	2.7	16.8	53.8	26.6	100.0
	3歳	人数	8	62	154	158	382
		%	2.1	16.2	40.3	41.4	100.0
年齢 (04年調査)	4歳	人数	11	47	105	201	364
		%	3.0	12.9	28.8	55.2	100.0
	6歳	人数	9	33	74	266	382
		%	2.4	8.6	19.4	69.6	100.0

### <育児不安質問項目>

育児不安総点と育児不安平均点;育児不安については、先行研究を参考に01年調査では19項目、04年調査では29項目の質問(付表1)をした。回答は4件法で、「よくある」4点、「まったくない」1点を配点した。逆転項目はその逆に配点する。合計点を育児不安総点とする。それぞれの総点を質問項目数で割ったものが育児不安平均点である。数値が高くなるほど育児不安が高いことを示す。

その他の属性;今回の分析対象としたのは、フェイスシートの他に、01年調査の子どもの気質的特徴、健康・発達状況、母親の就労意欲、04年調査の経済的ゆとり、祖父母同居などである。これらの項目の作成過程、項目内容につい

て詳しくは、筆者らのこれまでの研究を参照されたい<sup>(5)</sup>。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 孤立群と子どもの属性、母親の属性との関連

まず最初に、01年調査で地域とのつながりが薄い「孤立群」がどのような特徴をもっているかを見て見よう。孤立群は、一般群とくらべ、母親と子どもの属性の点で何らかの違いがあるだろうか。

01年時点での孤立群（1歳児と3歳児の母親の合計）は、子どもの性別、祖父母との同居・別居の割合、母親の平均年齢、母親の就労意欲、家庭の経済的ゆとりの状況、子どもの気質的特徴、健康・発達状況については全般的には、一般群との差はみられなかった。その中の個別的な項目について言えば、1歳児の孤立群で、排泄のしつけや身体発達の遅れがあり（親がそのように認識しており）、睡眠や食事の生理的リズムが不規則な傾向があった（付表2）。

#### 2. 孤立群と育児不安

01年調査における1歳児と3歳児の親、04年調査における4歳児と6歳児の親について、地域とのつながり総点ごとに育児不安平均点を比較してみた。

どの年齢でもより地域とのつながりが薄い群の方が、育児不安が高い（図1）。

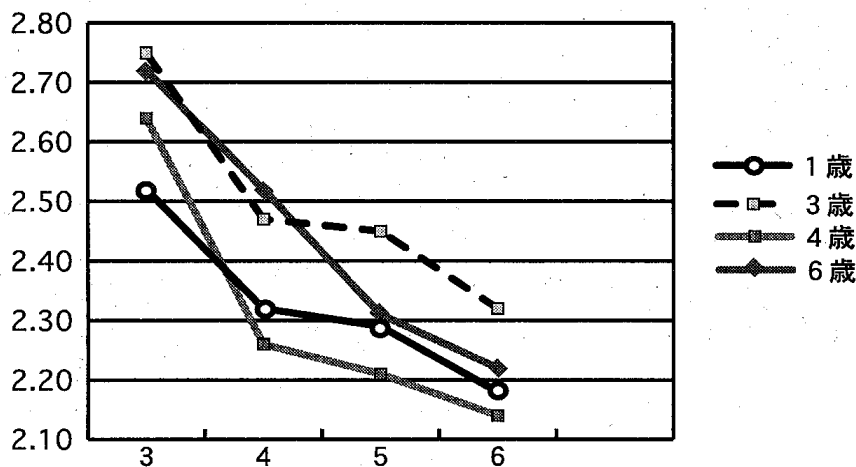


図1 地域とのつながり別育児不安平均点

表3 地域とのつながりと育児不安平均点（子どもの年齢別）

年齢	つながり点	人数	育児不安平均	標準偏差	F値	群間比較
1歳(01)	3	10	2.52	0.42	4.19**	3 > 6*
	4	61	2.32	0.38		
	5	196	2.29	0.38		
	6	95	2.18	0.32		
	合計	362	2.27	0.37		
3歳(01)	3	7	2.74	0.36	4.90**	3 > 6*
	4	59	2.47	0.40		
	5	153	2.45	0.42		
	6	158	2.33	0.37		
	合計	377	2.41	0.40		
4歳(04)	3	10	2.64	0.46	6.57***	3 > 4*
	4	43	2.26	0.37		
	5	98	2.21	0.37		
	5	194	2.14	0.38		
	合計	345	2.19	0.39		
6歳(04)	3	9	2.72	0.44	10.30***	3 > 5*
	4	32	2.52	0.50		
	5	68	2.31	0.39		
	6	260	2.21	0.39		
	合計	369	2.27	0.42		

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

どの年齢でも地域とのつながりが「3点（すべてなし）」と「6点（すべてあり）」との間には有意差があるが、特に年齢が高くなると、地域とのつながりの度合いが低い群と高い群とで育児不安平均点に有意差が目立つようになる（表3）。子どもが大きくなるにつれ、孤立群の育児不安は相対的により深刻になることが窺える。

### 3. 1歳～6歳時期における地域とのつながり状況と変化

地域とのつながりに関する3つの質問に対して、「ない」と答えている人の割合は、子どもの年齢が高くなるにつれて、減少していく傾向があるが、「相談相手がない」と答えている人の割合は、どの年齢でも6～7%であり、少数派であるがその割合は減少していかない（表4）。

表4 地域とのつながり項目に「ない」と答えた人数（子どもの年齢別）

		子連れで遊びに行ける家	子どもを預りあう家	子育て悩みを相談できる人
1歳	人数	66	266	20
	%	17.9%	72.3%	5.4%
3歳	人数	65	222	17
	%	16.9%	58.0%	4.4%
4歳	人数	54	158	22
	%	14.8%	43.3%	6.0%
6歳	人数	41	105	23
	%	10.7%	27.4%	6.0%
合計	人数	185	646	59
	%	20.8%	72.6%	6.6%

#### 4. 3年間の孤立の相関

各対象者の地域の人々とのつながりに関する回答について、01年調査時と04年調査時とのあいだの相関をみたものが表5である。いずれも有意な低い相関関係がみられる。「子育ての悩みを相談できる人」については1歳と4歳の間で、比較的強い相関がある。

表5 地域とのつながり3年後との相関

	1→4歳	3→6歳
子連れで遊びに行ける家	.205***	.298***
子どもを預りあう家	.312***	.298***
子育て悩みを相談できる人	.445***	.266***
つながり総点	.415***	.381***

ピアソンの相関係数, \*\*\* $p < .001$

個々の質問ごとに01年と04年の2時点での調査の回答（1歳児の親と3歳児の親の合計、4歳児の親と6歳児の親の合計）をクロス集計したものが下記の表である。「子連れで遊びに行ける家」は、01年に「ない」と答えた人のうち、04年には「ある」になった人が69%、「ない」ままの人が31%である。「子どもを預りあう家」については、01年に「ない」と答えた人のうち、04年には「ある」になった人が54%、「ない」ままの人が46%である。「悩み事を相談できる身近な知人」は、01年に「ない」と答えた人のうち、04年には「ある」に

乳幼児をもつ親の地域とのつながりの変化とそれに関連する要因—3年間の変化を中心に—

なった人が57%、「ない」ままの人が43%である。「子連れで遊びに行ける家」がないままの人の比率に比べて、「子どもを預かりあう家」や「悩み事を相談できる身近な知人」はないままの人の比率は多い。後者の方がより深いつきあいであるので、そのようなつながりができることは容易なことではないと思われる。これらの面については、「孤立」が持続している人たちがかなりいるということが分かる。

表6 01年調査でのつながりと04年調査でのつながり

表6-1 「子連れで遊びに行ける家」

			04年調査		合計
			ない	ある	
01年調査	ない	人数	40	90	130
		%	30.8%	69.2%	100.0%
	ある	人数	55	562	617
		%	8.9%	91.1%	100.0%
	合計	人数	95	652	747
		%	12.7%	87.3%	100.0%

表6-2 「子連れで預かり合う家」

			04年調査		合計
			ない	ある	
01年調査	ない	人数	224	261	485
		%	46.2%	53.8%	100.0%
	ある	人数	37	224	261
		%	14.2%	85.8%	100.0%
	合計	人数	261	485	746
		%	35.0%	65.0%	100.0%

表6-3 「子育て悩み事相談できる身近な知人」

			04年調査		合計
			ない	ある	
01年調査	ない	人数	16	21	37
		%	43.2%	56.7%	100.0%
	ある	人数	29	681	710
		%	4.1%	95.9%	100.0%
	合計	人数	45	702	747
		%	6.0%	93.9%	100.0%

## 5. 孤立解消と関連する要因

上記のように、地域とのつながりについては3年間の間において相関があり、個々の項目別に見れば同じ状態が持続している人がかなりいる。しかし一人ひとりの親に即して言えば、同じように01年の時点では孤立していた人々の中でも、3年後にはつながりを持つことができている人（孤立解消群）と、依然として孤立している人（孤立持続群）がある。孤立が解消するか持続するかに関連する要因をさぐるために、ふたつの群と子どもの属性、親の属性、生活状況などとの関連を検討してみる。そのために、孤立解消・持続と、各属性との関連について、カテゴリ変数についてはクロス集計をし $\chi^2$ 検定を行い、他の変数についてはt検定を行った。有意差のあったものを表示する。なお、この分析部分については、孤立持続群各群の人数が少ないので、有意確率10%水準のものも、「有意差はないが、（何らかの差がある）傾向がある」として試みていくこととする。

### (1) 子どもの特性との関連

孤立解消群と孤立持続群の間には、子どもの性別、就園状況のほか、子どもの年齢に関しては有意差がなかった。従って以下の分析においては、1歳スタート群と3歳スタート群とを一緒にして検討する。

04年時点のきょうだいの中の位置については、関連があった（表7）。質問の対象となった子どもがきょうだいのいる長子の場合、次子や一人っ子と比べ、孤立解消群の比率が有意に高い。きょうだいのいる長子をめぐっては、幼稚園・保育園でのつながりや、次子が生まれるにともなってまた新たな関係でのつながりももちやすいことが影響していると思われる。次子についても同じことが言えそうであるが、調査時点で二人以上の子どもがいながら孤立している場合、上記のような潜在的な条件をうまくいかしていくことができないという点で、母親の状況としてはより深刻なのかもしれない。

孤立状態が解消したかどうかは子どもの気質的特徴や行動特性に関しては、01年時点での項目とは関連がなかったが、04年時点での項目とは関連があり、孤立持続群のほうが、子どもの行動上の困難さが高く、発育・発達の遅れを親が感じている程度が高かった（表8）。01年調査の3歳までより、子どもが活発



乳幼児をもつ親の地域とのつながりの変化とそれに関連する要因—3年間の変化を中心に—に外へ遊びに行ったり友達と一緒に遊ぶようになる4歳以降の方が、行動上の難しさや発育・発達の遅れを親が気にしてつながりをつくりにくくなるのではないだろうか。

表7 きょうだい中の位置との関連

		孤立継続群	孤立解消群
対象児はきょう だいの何番目	一人っ子	8 33.3%	16 66.7%
	長子	12 19.0%	51 81.0%
	次子	21 44.7%	26 55.3%
	合計	41 30.6%	93 69.4%

$$\chi^2(2) = 8.432, p < .05$$

表8 孤立解消と子どもの発達・行動特徴

01→04地域つながり変化		N	平均値	標準偏差	t 値
気質14(01)	孤立継続群	40	38.3	5.08	0.885
	孤立解消群	90	39.2	5.18	
発達点(04)	孤立継続群	41	16.8	5.45	2.607**
	孤立解消群	94	14.7	3.75	
困難点(04)	孤立継続群	37	88.5	17.37	2.213*
	孤立解消群	88	82.0	13.39	

$$*p < .05, **p < .01$$

## (2) 母親の特性、生活状況との関連

孤立状態が解消したかどうかについては、祖父母同居、母親の年齢、末子の年齢などとの関連はみられなかった。しかし、母親の仕事との関連はみられ、フルタイム（04年時点）の場合、専業主婦やパートタイムに比べ、孤立持続群の比率が高い（表9）。フルタイムで働いている母親の場合、保育園や職場で子育ての相談はできるかもしれないが、地域でのつながりがつくりにくいことが影響していると思われる。

表9 孤立解消と母親の仕事

		孤立継続群		孤立解消群	
母仕事(04)	専業主婦	人数	17		46
		%	27.0%		73.0%
	パート	人数	8		26
		%	23.5%		76.5%
	フルタイム	人数	11		9
		%	55.0%		45.0%
合計		人数	36		81
		%	30.8%		69.2%

$$\chi^2(2) = 6.77, p < .05$$

### (3) 01年時点での支援機関参加

01年調査で子育て支援センターや児童館などの事業に参加したかどうかという質問とクロスさせてみると子育て支援機関事業に参加した群ではしない群と比較し、孤立解消群の比率が高かった（表10）。01年時点での孤立群はもともと一般群にくらべ児童館や子育て支援センターなどの事業に参加する人の率は少ないが、その中でもそのような支援事業に参加した人は、3年後の孤立解消と関連があるようである。公的な支援機関の効果がある程度年月がたつてからも影響力を及ぼすことを示しているといえよう。

孤立解消群・持続群は、子どもの就園状況（04年時点）と関連がなかったことから、ほとんどの子どもが就園していない1歳と3歳の時点で子育て支援機関の事業に参加したことがあるという経験は、その後につながりをつくることに発展していっていると考えられる。

04年調査で、家庭の経済状況を尋ねた質問への回答別に孤立状況の変化をみたものが、表11である。特に「ゆとりがない」と回答している群では「孤立持続群」の方が多い。経済的にゆとりがない場合、地域でつながりをつくる余裕がない人が多いのであろうか。

表10 孤立解消と01年における支援機関参加

		孤立継続群	孤立解消群	合計
支援センターか児童館参加(01年)	あり	6 15.8%	32 84.2%	38 100.0%
	なし	37 36.3%	65 63.7%	102 100.0%
合計		43 30.70%	97 69.30%	140 100.0%

$$\chi^2(1) = 5.46, p < .05$$

表11 孤立解消と経済的ゆとり

		孤立継続群	孤立解消群	合計
かなりゆとりあり	人数	1	6	7
	%	14.3%	85.7%	100.0%
少しゆとりあり	人数	14	29	43
	%	32.6%	67.4%	100.0%
あまりゆとりがない	人数	16	48	64
	%	25.0%	75.0%	100.0%
ゆとりがない	人数	11	9	20
	%	55.0%	45.0%	100.0%
合計	人数	42	92	134
	%	31.3%	68.7%	100.0%

$$\chi^2(3) = 7.37, p < .10$$

#### IV. まとめと考察

地域の人々とのつながりが薄い人は、育児不安が高く、子育て支援が必要な層である。

地域の人々とのつながりは、全体としては子どもの年齢が上がるにつれて、密になっていくが、個々の親についてみれば、かならずしも1歳または3歳という年齢からの三年間一貫しているものではなく、かなり変化するようである。その中で一貫して孤立したままの層もあれば、3年後には孤立が解消している人々もいる。

本研究で見出された第一の点は、孤立を解消する方向での要因として、「児童館や子育て支援センター事業への参加」が見いだされたことである。子育て支援機関の事業が、子育て中の親に即時的に有効であるだけでなく、一定の期間に渡って親の子育てを支える役割を果たしていることが示唆されたことである。

もちろん「3年前に児童館などの支援事業に参加したというたったひとつのことが3年後にも影響力がある」ということではなく、そのような公的な支援機関に参加することをきっかけにして、他の機関を紹介されたり、その中で自然発生的な地域とのつながりがめばえていく、そのような3年間のプロセスが生じているのであろう。いわば公的サポートが自然発生的サポートを促進しているといえるだろう。3, 4歳で就園する場合、親はすでに子育て仲間をつくって入園してくることが多いので、その前の友達づくりのサポートをする場として子育て支援機関の事業は直接的・間接的に機能しており、その役割は重要である。

第2には、フルタイムで就労している母親の場合、地域での孤立が解消されにくいことである。諏訪らの指摘にも保育所の母親は近隣との相談が少ないことが指摘されている<sup>(6)</sup>。もちろん彼らは時間的にも精神的にも「仕事」というもうひとつの場を持っているしその場でのサポート関係も作っていることであろう。しかし、子どもが幼児期から学童期・中学生の時期になってくるとよりいっそう地域での親仲間のつながりが重要になってくる。そのような意味でも保育所の、保育所の親に対する親同士のつながりづくりの必要性が高くなる。様々な雑誌や研究会でそのような実践が報告されているが、日本全体としてみれば幼稚園の親どうしが話し合う程度に比べ保育所のそれのほうはかなり少ないようである<sup>(7)</sup>。先進的な例に学びながら、とりわけフルタイムの共働き家庭の地域でのつながりづくりに取り組んでいく必要があるだろう。

第3には、リスクファクターをもった親への集中的な支援の必要性である。筆者らはこれまで子どもの子育て困難にかかわるリスクファクターが育児不安と関連しており、それに応じた支援の必要性を述べてきたが、今回も若干であるがそのような傾向がみられた。

1歳時点での孤立している親には睡眠や食事の生理的リズムが不規則な傾向があった。このような「育てにくさ」や「他の子より遅れているのでは？」という親の困難感や自信のなさが孤立と関連していることが示唆される。子どもが行動上の困難をもっている場合、まわりの子どもたちが友達の家を行き来して遊ぶようになる時期、親はますます孤立しやすくなることも示唆されたので、そのような親を視野に入れた子育て支援が求められる。

乳幼児をもつ親の地域とのつながりの変化とそれに関連する要因— 3年間の変化を中心に—

さらに04年では経済的ゆとりについても尋ねたが、そのゆとりのなさや孤立が持続することとの関連が示唆された。垣内<sup>(8)</sup>は、経済的な条件と育児不安との関係について一定の関係があることを示している。経済的なゆとりのなさが、様々な心配や生活条件に関連し、周囲の人とのゆったりとしたつきあいをする余裕をもてなくしていることも考えられる。今後はリスクファクターとしてこのような経済的要因も含めて、さらに検討していきたい。

本研究は愛知県児童総合センター委託研究（平成12年度・神田直子）と日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究c、平成14～16年度、代表 山本理絵）による研究である。

（注）

- 1) 服部祥子・原田正文『乳幼児の心身発達と環境』名古屋大学出版会、1991年
- 2) 筆者らは、子どもを育てる主体は第一にその子どもの両親であり、母親のみであるべきであると考えてはいない。また、父親が第一義的に育児の主体となっているケースも存在し、増えてきている。しかし、現在の日本では乳幼児の育児を母親が担っている家庭がほとんどであること、本調査の回答者も圧倒的多数が母親であったため、母親回答のみを採用したこと、このふたつの理由で、本研究では、育児に携わる親の代表という意味で「母親」という用語を使用する。
- 3) 神田直子「現代の社会状況と家族の実態」金田利子ら編『家族援助を問い直す』p.52、同文書院、2004年
- 4) 神田直子・山本理絵「子育て困難を抱える親への子育て支援のありかた。」（共同）『愛知県立大学児童教育学科論集』第35号、2001年、pp.21-42
- 5) 上記4)のほか、山本理絵・神田直子「育児期の困難さに応じた子育て支援」『季刊保育問題研究』201号、2003年、神田直子・山本理絵「1歳から4歳における、子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント」（共同）『愛知県立大学児童教育学科論集』第37号、2004年など
- 6) 7) 諏訪きぬら「日本の子育て実態と子育て支援の課題 第2章 3節 母親の望む子育て支援」『保育情報』355号、pp.30-34、保育研究所、2006年
- 8) 垣内国光「現代の育児不安・育児困難の階層性に関する考察—川崎市の保育要求地域実態調査から」『明星大学社会学研究紀要』25巻、pp.21～31、2005年

付表1 育児不安質問項目（★以外は04年調査のみ）

質問項目	01年と共通	逆転項目
子育て離れて一人になりたい気持ちになるときがある		
子どもに時間がかかり、自分のやりたいことができなくなってしまうとあせる		
身体の疲れがとれず、いつも疲れている感じがする		
自分一人で子育てしているのだという圧迫感を感じてしまう	★	
疲れやストレスがたまってイライラする		
誰も子育ての大変さ分かってくれないと思う		
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	★	
育児や家事など何もしたくない気分になる		
子育ては自分に合っていないので、早く好きなことしたい		
子育てをするようになってから社会的に孤立していると思う		
子どもを産んで良かったと思う		◎
子どもを宝物のように感じる		◎
子どもを育てるのは楽しい	★	◎
子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う		◎
子どもといるとゆったりした気分になる		◎
育児によって自分が成長していると感じられる	★	◎
昨年に比べ全般的に育児が楽になった		◎
子どものことでどうしたらよいか分からなくなることがある	★	
自分の子どもの育て方はこれでいいのかと思う		
自分は子どものことを分かっていないのではと思う		
子どもを育てる自信がなくなることがある		
周りにどう思われているか気になる		
毎日生活していて心に張りが感じられない		
何か心満たされず空虚である		
一日が充実していてハツラツとしている	★	◎
子どもをついたたいてしまうことがある	★	
自分は育児に向いていると思う	★	◎
自分は子どもをうまく育てていると思う	★	◎
子どもから離れて外出するのは心配でしかたがない	★	

付表2 孤立群と一般群の子どもの気質的特徴、発達の遅れ得点(01年調査、1歳)の比較

1歳	孤立群	人数	平均値	標準偏差	t値	
手がかかる	孤立群	71	14.62	2.82	0.58	
	一般群	291	14.39	2.99		
人へのなれにくさ	孤立群	70	5.26	2.03	0.35	
	一般群	296	5.17	1.92		
子どもの 気質的特徴	リズム不規則	孤立群	71	7.13	1.56	2.05*
		一般群	295	6.68	1.66	
機嫌の悪さ	孤立群	69	7.00	1.72	0.91	
	一般群	292	6.79	1.71		
発達の遅れ	身体発達の遅れ	孤立群	72	3.08	0.98	2.47*
		一般群	295	3.38	0.89	
	排泄のしつけ遅れ	孤立群	68	2.78	0.88	2.40*
		一般群	267	3.06	0.86	

\* $p < .05$